

「館山聾学校統合問題を考える」

山下浩巳

千葉県教育委員会は、昨年10月、県立館山聾学校の名称変更に関する「県立特別支援学校設置条例」の改正案を審議し、名称変更することを決めました。同条例改正案は、同年12月県議会へ提出される予定でしたが、卒業生等の強い反対から見送られることになりました。

しかし、県教委は、「館山聾」という名称を残すことも含めて再検討することに加えて、同窓生が集える場所を確保するように配慮したいと述べてつつも、同校を安房特別支援学校に統合する姿勢を崩しては

いません。

館山聾学校は、日本一の設備を生かし、日本で三本の指に数えられる教育実践校と称えられた名門校です。1958年に県立千葉聾学校館山分校として設置され、以来50年以上にわたり、南房総地域の聴覚障害教育において先導的な役割を果たしてきました。

ところが、2010年度は、小学部に6年生1人、幼稚部は、情緒や言葉などの発達の遅れのある8人、地元の小学校に通いながら通級指導教室で指導を受

ける児童が25人。中学部は在籍者がおらず、来年4月からは、6年生が千葉聾学校へ入学するため、聴覚障害児の在籍者がなくなるといった状況です。少子化の進む中、限られた財源を有効に使うためには、学校の統廃合もやむを得ないとも考えられます。しかし、同校の統合問題が表面化するとすぐに、同校の卒業生や旧職員による見直しを求める署名運動が活発に行われました。彼らは、「館山聾学校の名前を残してほしい」「健常者の目線で聴覚障害者の教育機会を奪わないでほしい」と訴えました。この運動がなぜ起ったのかたどっていくことによって、ふだん接することの少ない聴覚障害を持った方々の置かれている立場について考察を深めると同時に千葉県の教育、福祉行政のあり方を考えていきたいと思っています。

まず、県教委の方針は、同校卒業生や旧職員、地元の関係者らにとっては寝耳に水でした。県が設定した10月16日の説明会では十分な連絡がされず、驚いた関係者が独自に連絡を取り合って駆けつけるような状態でした。主催者の県は、当初、質疑を30分

程度で終わらせる予定でしたが、会場の熱気に押された形で、結局、2時間続けることになりました。

会場では、①パブリックコメントの募集期間が短すぎる ②情報が乏しく、関係者への周知が十分になされていない ③説明会で出た提案や質問に対する回答はいつどのような形で出されるのか、などの質問や疑問が多数出ました。また、同校卒業生が、「校名を変えないように」などと懸命に訴えましたが、さちんとした通訳がなされず、参会者にその思いを伝えることができませんでした。

平成18年度の国の調査で分かっている日本の聴覚障害者数は、18歳以上で34万3000人、18歳未満で1万5800人です。およそ1000人に3人が聴覚障害者ということになります。

障害の発生した原因としては、胎児期に母体が何らかのウイルスに感染したり、耳の組織の形状が正常に発達しなかった場合に、先天的な聴覚障害が現れることがあります。後天的な聴覚障害の原因は実に多様です。薬の副作用、事故などでの頭部負傷、突発的疾患、過労やストレスのほか、騒音によって引き起こされるケース、加齢による衰えなどがあげ



広い校庭の館山聾学校

られ、何が原因なのか特定できない場合もあります。人間が言葉を習得するとき、聴覚は想像以上に大切な役割を果たしています。たとえば、赤ん坊が「ママ」という言葉を母親のことだと認識するには、およそ6000回のやりとりが必要といわれています。人間は「見て、聞く」という行為を繰り返して、言葉とその意味を身につけていきます。聴覚に障害があると、音声情報と視覚情報を一致させることが難しいため、言葉の習得が遅れがちになります。目の前にある物の役割や特徴は理解できても、それを指し示す名称を覚えるのに実に多くの努力を要するからです。

このように、聴覚と言葉の習得は密接な関係にあるからこそ、聴覚に障害がある場合は、言葉を学ぶための特別な機会を設けることが必要となるのです。

そして、聴覚障害者が共通して悩むことは「孤独感」だそうです。たとえば、会議中、ひとりずつ順にプレゼンテーションを行う場合には、口の動きを読み取る口話法で、その内容を理解できることもあります。しかし、会議が白熱して全員が参加する議

論に発展すると、すべての人の口の動きを読み取り、それを理解するのは難しいことです。こうした場面に限らず、聴覚障害者は日々、コミュニケーションがうまくいかず孤立し、孤独を感じているといいます。あるとき顔を上げたら、みんながこちらの方を見て笑っているような気がした——そんなとき、自分が笑われていたのではないかと不安が襲います。ヘレンケラーは、「目が見えないことは人と物とを切り離す。耳が聞こえないことは人と人とを切り離す」ということを残しています。

今回の取材で、聴覚に障害を持った方から手話通訳者を通して話をうかがうことができました。熟練の手話通訳者は、普通に会話すると変わらないぐらいのスピードで通訳をすることができます。そういう技術を持った人材を養成することの重要性を、この取材から、まず感じました。

ところが、そのような配慮はきわめて不十分であるのが、千葉県の実態だそうです。そこには、聴覚障害に対する認識の低さがあるようです。館山聾学校の説明会で手話通訳者を手配しなかったこともそ

の一例です。そして、そういう対応が、聴覚障害者に「自分たちには人権がきちんと認められていない」という思いを強く抱かせるわけです。

そして、お話をうかがう中で、館山聾学校の卒業生の皆さんを動かしているものが何か、少しずつ見えてきました。

人間は、コミュニケーションをとる中で、他人は自分とは違った価値観を持っていることを知りまします。価値観の違いは、多かれ少なかれ衝突を生じさせ、そこから悩みや苦しみを味わうことになります。しかし、同時にその過程の中で、自分らしさというものをも身につけていくきっかけを得ます。やがて、そのくり返しは、アイデンティティの確立につながることであります。自分が自分であるためには、他者とのコミュニケーションが不可欠なのです。

もし、他の人間よりもコミュニケーションをとることが困難な事情があれば、アイデンティティの確立には、より多くの時間と労力が必要となるはずですが。しかし、その過程の中で形成された人間関係は、より深い絆を生むことになるでしょう。「あの人がいたから、あの学校があったから、今、自分はこう

していられる」という思いを強く感じて生きていくことになるのではないのでしょうか。

そうだとしたら、今の自分を育ててくれた場がなくなってしまうことの喪失感は、本人にしかわからない痛みを伴います。だから、なんとか統合を阻止して、館山聾学校の名前を残したいと強く感じ、その思いが、卒業生の皆さんを突き動かしていると思われるのです。

そして、この思いを痛いほどわかっているのが、同じ学び舎で過ごした職員の方々です。最後に、ある旧職員の方のことばをホームページから抜き出します。

「特別支援学校」と呼べば、どの障害児も受け入れて簡単に教育できると思ったら大間違いである。養護学校とは違い、聾学校では何時も子どもと目を合わせ、口形を見せながら言葉を定着させなければならぬ。それには、教師の根気と絶え間ない研修が必要になる。気の抜けない仕事で生半可な気持ちではとうてい勤まらない。かつての館山聾学校は、「日本一の設備」と「日本で三本の指に数えられる教育

実践校」と評価されていたことも加わって、非常に厳しい職場でもあった。

聴覚障害者に説明の場を設ける際には、合理的配慮として手話通訳、要約筆記等の準備が必要なのは常識である。千葉県は、全国に先駆けて「障害者を差別しない」という条例を作った。合理的配慮が無いということは、聴覚障害者への差別である。県教育委員会なら、合理的配慮を率先して行うべき立場にあるのは当然ではないか。

(本号担当編集委員)